博士論文（要約）

小学校教師の協働学習における専門性の検討

―実践的知識を中心に―

児玉　佳一

本論文は，協働学習における教師の専門性を明らかにすることを目的とした。全5部 11章からなる。

第Ⅰ部　問題と目的

第1章では，協働学習研究の概観から，教師は協働学習の成否を左右する相互作用の質，学習者特性，学習環境を整えることができる重要な存在であると位置づけた。また，教師の専門性研究の概観から，実践的知識，授業認知，実践的知識の形成・変容（専門性発達）から専門性の内実が検討されており，これらの研究枠組みを参照しながら協働学習という文脈での専門性を検討する必要性を指摘した。

第2章では，「協働学習における教師」を検討した研究の概観から，①学習中のモニタリングやサポートが教師の重要な役割であるが教師にとって最も困難であること，②実践的知識については，信念や価値観を示す命題的な実践的知識の様相と，状況に埋め込まれた方法的な実践的知識の様相を捉える必要性，③授業認知については，単一のグループ学習場面だけでなく，より包括的な協働学習場面を検討する重要性，④専門性発達については，長期的な過程で捉えることに加えて，新任教師や，新任教師を指導する熟練教師の指導に関する専門性発達といった多様な視点から検討する重要性を指摘した。

第3章では，これまでの議論から，協働学習における教師の専門性として実践的知識に着目し，①実践的知識の様相，②授業認知（モニタリングとサポート）における実践的知識の活用，③実践的知識の発達的変容（専門性発達）の3点を検討課題として整理した。さらに，①実践的知識の様相は，命題的な実践的知識と方法的な実践的知識から検討すること，②授業認知は，学習形態の変更場面や単元を通した調べ学習といった状況を検討すること，③実践的知識の発達的変容は，熟練教師の“実践家”としての発達と同僚や後輩に指導する“指導者”としての発達の両面や，新任1年間の発達を検討することに焦点を当てた。

第Ⅱ部　協働学習における教師の実践的知識に関する質問紙研究

第Ⅱ部では，検討課題①「協働学習における実践的知識の様相」を検討した。

第4章（研究1）では，“協働学習”に対するイメージと“協働学習を支える教師”に対するイメージから命題的な実践的知識を捉えることを目的とした。87名の小学校教師および83名の小学校教師志望学生を対象に比喩生成課題を実施した。主な結果として，①教職志望学生は協働学習のあり方のイメージが明確ではなかったが，現職教師は具体的な協働学習のあり方をイメージしていること，②“協働学習を支える教師”について教職志望学生は「教師の役割」という行動面のイメージが多いが，一方で現職教師は「教師のあり方」や「求めら

れる能力」といったメタ的な面をイメージしていること，③現職教師は“協働学習”に対するイメージと“協働学習を支える教師”のイメージが関連していることが示された。

第５章（研究２）では，場面想定課題を用いてグループ学習場面における方法的な実践的知識を捉えることを目的とした。研究 2-1 では 81 名の小学校教師と 48 名の小学校教師志望学生に算数科の場面想定課題を，研究 2-2 では 87 名の小学校教師に国語科の場面想定課題を実施した。主な結果として，①グループ学習の評価観点は“学習内容の理解”＜“友人との交流”＜“学習への参加”の順に重要視されており，現職教師や競争的学習観の強い教師は“学習内容の理解”を，協働的学習観の強い教師は“友人との交流”や“学習への参加”を重要視していること，②教職志望学生と現職教師の支援方略の相違は「活動への称賛」にあるが現職教師間で教職経験年数によって支援方略に大きな相違はないこと，③支援方略と場面の関連づけ方については，現職教師間でも教職経験年数によって「他グループとの関係づけ」に相違があり，協働的学習観が強い教師はグループ学習目標があまり達成されていない場面で「個別活動の提案」を行う傾向にあることが示された。

第Ⅲ部　協働学習中に埋め込まれた実践的知識に関する事例研究

第Ⅲ部では，検討課題②「授業認知（モニタリングとサポート）における実践的知識の活用」を検討した。

第６章（研究３）では，ある１学級での小学６年生国語科の授業の参与観察と再生刺激インタビューより，学習形態の変更に関するモニタリングとサポートを事例的に検討した。その結果，①想定内の状況では事前に把握していた個人の問いをクラス全体で「共有」する話し合いや，議論によって教科内容の深まりを目指して「吟味」する話し合いが導入されること，②想定内の状況では学習形態を変更するよりも前の段階でのサポートが丁寧に行われること，③「吟味」の展開過程や児童の発言が発端となる「確認」などの想定外の状況では「行為の中の省察」を通して新たな「行為の中の知」を形成しながら進めていること，④モニタリングやサポートは教師の授業観と関連することが示された。

第７章（研究４）では，ある１学級での小学５年生社会科の調べ学習の授業の参与観察と再生刺激インタビューより，単元を通したモニタリングとサポートについて検討した。再生刺激インタビューにはウェアラブルカメラの映像を用いた。主な結果として，①単元の前半では児童の学習への参加状況や学習者像を掴むために俯瞰的なモニタリングを行い，教師から関与するサポートを多くまたは長く提供していること，②単元の後半ではリソースの配分に意識を向けて，グループ間差を捉えようと焦点的なモニタリングを行っていること，

③内容面へのモニタリングは「進行表」というツールで行っており，サポートも進行表を媒介して行っていること，④モニタリングとサポートが同時並列的に行われていること，⑤事前に得た情報や知識からモニタリングせずサポートすることもあることが示された。

第Ⅳ部　協働学習に対する教師の専門性発達に関する事例研究

第Ⅳ部では，検討課題③「実践的知識の発達的変容（専門性発達）」を検討した。

第８章（研究５）では，協働学習の熟練教師として浜崎先生（仮名）のライフヒストリーから専門性発達過程を検討した。その結果，①“実践家”としては，「子どもが支え合い，つながっていく姿」に向けた「探究の保障」と「協同による参加の保障」の２つのパーソナルセオリーの構築過程がみられ，先輩教師の授業観察や指導，同僚教師との実践の議論，そして自身が共感できる実践の見学と研究者の助言が寄与していること，②“指導者”としては，自身の経験を踏まえて，「教材研究の重要性」，そして“当事者性”と“客観性”を両立させた実践と観察およびその省察を含んだ「省察を伴う実践と観察」を指導スタンスとしていること，③新任教師の指導は「教えなければいけない」という使命感から脱却できない，研修等で教師主導の統制的指導の型を求められる，実践を観察する意味が理解できないといった難しさがあることが示された。

第９章（研究６）では，浜崎先生から指導を受けた元新任教師として此田先生（仮名）の新任期のライフヒストリーから専門性発達過程を検討した。その結果，①教職初期には協働学習に対する命題的な実践的知識が「*グループ学習*」だったのに対して，浜崎先生の実践の見学を通して，子どもたち同士が意見の「*キャッチボール*」をしながら「*言葉を塗り重ねて*」展開するような学習といった命題的な実践的知識に変容したこと，②こうした実践には教師が「*つなぎ役*」として位置づくことを見出すが，具体的な方法的な実践的知識はすぐに形成されず，浜崎先生の授業見学や自分で実践し省察する中で「*引き出す*」，「*待つ*」といった実践的知識を形成すること，③実践的知識の形成には浜崎先生以外の同僚教師から影響を受け，取捨選択しながらパーソナルセオリーを構築すること，④新任期特有の忙しさにより実践的知識の形成が阻害されることや，先輩教師間の意見が対立する中でのジレンマがあること，指導されたことに対する理解が漸進的に生じることが示された。

第Ⅴ部　総合考察

第 10 章では，各研究の知見についてまとめた上で本論文の意義を論じた。命題的な実践的知識については，“協働学習”そのものと，“協働学習を支える教師”の両面から包括的な様相を示すことができた。方法的な実践的知識については，サポートに関わる実践的知識の多

様性やモニタリングに関する実践的知識の様相，そして協働的に学ぶ授業におけるモニタリングとサポートの関係性を示すことができた。専門性発達については未経験者（学生）と経験者（現職教師）の相違や，現職教師としての長期的な発達における実践的知識の変容過程に関わる諸要因（命題的な実践的知識に基づいた方法的な実践的知識の形成，協働学習以外の授業との折り合いの付け方，省察を伴う実践と観察の重要性，同僚教師が与える影響の複雑性，新任教師の指導に対する遅延的理解）を示すことができた。本論文によって描き出された「協働学習を支える教師」の専門家像は，先行研究でしばしば無機質に描出された「効果的な学習への導き手」としての教師像でなく，協働学習に関わる自分自身のあり方を問い，複雑かつ未知な実践状況の中でも（時に判断を急がずに熟慮しながら）絶えず行為の選択を判断し，そして，自らが描く協働的な学びの実現に対して様々な苦心・苦慮を抱えながらも社会文化の中で熟達していく「協働的な学びの造り手」としての教師像であったといえる。

第 11 章では，本論文の課題点や限界点および今後の研究展望について論じた。課題点や限界点は，協同学習と協働学習という理論的枠組みの不明瞭さ，検討した実践場面・発達的視点・対象者の限定性，実践的知識を捉える手法の限界を示した。そして今後の研究展望として，Pedagogical Content Knowledge や情動知との関連の検討，ICT との関連の検討，協働学習中以外の活動フェーズの検討，協働学習について学ぶこと（教師教育）の検討を示した。